

受験システムの自己準拠化と隠れたアジェンダ

竹内 洋 (京都大学)

受験システムの自己準拠化

日本の生徒の学力が高いのはなぜかについての興味深い研究をおこなったリチャード・リン(Lynn,R.)は、その著書のなかで日本の高校や大学が細かに序列化されていることにあらためて注意を払っている。なんらかの学校の序列化はイギリスにもアメリカにも大陸ヨーロッパにもみられる。ロンドンでは一流中等学校は、ウェストミンスター校、セント・ポールス校、ダルウィッチ校である。そのつぎにエマニュエル校やシティー・オブ・ロンドン・スクールなどがくる。最後に総合制中等学校がつづく。地方都市においてもそれぞれの都市に2、3の有名私立校があるが、それ以外は総合制中等学校である。しかし、上位に位置づけられる学校は少数であり、しかもこれらエリート校の間に明確な学校序列が存在するわけではない。いわんやその他の一般校に明確な序列があるわけではない。ところが日本では「学力によって序列化されているのは一握りの学校にとどまらない。すべての学校が序列化されている。したがって、14歳の日本人はできるだけよい学校に入学しようとする誘因にとり囲まれている」(Lynn,R. Educational Achievement in Japan:Lessons For The West,Macmillan,1988. p.29)。

細分化された学校序列を照準にした選抜システムは「傾斜的」選抜システムと呼ぶことができる。こうした傾斜的選抜システムによって(学歴社会の)従属システムとしての「受験社会」が自律化し、自己準拠的構造をビルト・インする。学校ランクや偏差値ランクがそれ自体として競争の報酬になり意味の根拠となってしまうのが受験システムの自律化/自己準拠化である。受験システムの自己準拠化は、目的との関係測定が不可能でありながら増殖し、原因の消滅にもかかわらず結果だけが増殖する事態「超成長」(Baudrillard,J.塚原史訳『透きとおった悪』)に酷似している。

受験競争の過熱は学歴の社会経済的地位達成機能という外部ではなく、いまや受験システム内部に構造化され

ている。こうみえてくると、いまの受験を功利的に意味づける大企業への就職についても怪しくなってくる。たしかに、大企業への就職は受験システムの外部にあり、安定した生活への功利的欲求に根ざしているようにみえる。しかしこれとて、受験システムが外部に設定した欲望にすぎないのではないか、と疑ってみる必要がある。たとえば、こう考えてみればよい。自分はファッション関係にすすみたいなどといっている学生も、就職シーズンになると、せっかく一流の〇〇大学生だから、やはり××銀行のような手堅く伝統のある企業に就職することにしようとする(チャータリング)ことを。

欲望の解体と精神の官僚制化

こうして受験システムはその内部に欲望と野心を照準させるが、そのことによって将来を呪んだなになるかや、なにをするかの長期的野心を煮詰めさせ解体させてしまうというパラドックスが生じる。こうしたパラドックスはすでに戦前の社会にもみられる。受験システムの自律化という逆立ちした受験競争は日本では戦前からの現象であるからだ。

学歴の地位達成の効用がきわめて大きかったのは明治30年ころまでである。それ以後「高等遊民」「知識階級の失業問題」などと学歴収益率の低下がさかんにいわれるようになる。ところが、上級学校志願者数は減ることはなかった。学歴収益率の低下の時代に受験競争はますます激化した。受験システムがその内部に報酬(受験の成功や学校ランク)をみずから立ちあげたからである。したがって戦前(昭和初期)においてすでにつぎのようなことがいわれている。「中学生に対して『君は何の目的でそれほど苦勞して中学校に進入らねばならぬか』と問うても本人も父母も、将来について確信の有るは少ない」(『中学世界』第29巻3号、昭和元年)。あるいは大正6年に、第一高等学校教授が当時の受験雑誌のなかで既につぎのように述べている。受験者に目的がなくなっている。何を目的にして入学しようとしているかわからない、といい、さらにつぎのようにつづけてい

る。「現今の学生たちには自分の確たる目的を定める余裕がない様です。中学校を卒業すれば、直に高等学校の受験準備に取りかゝるといった具合に、十分考へて居る余裕が与へられてゐない様に思はれます。たゞ中学を卒業すれば、高等学校に入り、高等学校を出れば、大学に入る、そうしてゐる中には何とかなるだらう位な計りで、たゞ其の日その日の勉強をしてゐる者も数多くある様に思はれます」（『受験準備に際して』『受験界』第1巻1号）。

しかしいうまでもなく、戦前はこのような受験システムに巻き込まれるのは少数の人だった。受験がほとんどすべての若者を巻き込んだのは戦後である。高校進学率が50%を超えるのが1954年。1974年には90%を超えるにいたる。大学進学率が30%を超えるのは1971年である。いまや受験競争は過熱化しながらも、いや過熱化すればするほど将来の欲望や野心、ビジョンを空洞化させてしまうというパラドックスが大衆的規模で生じている。受験生は、手の届く範囲の学校を目指すだけではない。自分の得意科目という手持の資産で、もつともトクをする出題科目と配点の学校を選ぶ。志望校は事後的に決定される。受験システムはただの戦術ゲーム人間を産出する。手段の集積によって事後的に目的が設定されるという近代の目的合理的行為という理念の逆立ち！。

試験は「知識の官僚主義的な洗礼Taufe, 世俗の知識の神聖な知識への化体Transsubstantiation の公認」

(Marx, K. 大内兵衛・細川嘉六訳「ヘーゲル法哲学批判からヘーゲル国法論（第261節—第313節）の批判」

『マルクス・エンゲルス全集 第一巻』大月書店、287頁）であり、知識の社会的定義や支配文化の教え込み（Bourdieu, P. & Passeron, J. C. 宮嶋喬訳『再生産』165-166頁）とされるが、日本社会においては精神の官僚制化をもたらしていることにむしろ着目したい。精神の官僚制化とは必要などときには完璧にすきのないパフォーマンスを演じるように自己を統御することである。自我を操作可能な対象とする精神の合理化である。しかし注意したいのは、こうした精神の合理化から計算と戦略の明確なマキャベリー的な主体を想定してはいけないということだ。操作する欲望や自我はすでに希薄である。「操

り人形の糸を一手に握っている人形使い」は存在しない（Collins, R. 井上俊・磯部卓三訳『脱常識の社会学』85頁）というゴフマンの描出する人間像が浮かびあがる。熱情もなく、意味もなくともそれなりにコミットしていく日本の受験システムが造形する人間像をここにみることが出来る。

マックス・ウェーバーは官僚制の批判のなかでつぎのように述べている。機械は気の抜けた魂であり、生きている機械である官僚制組織は気の抜けた知性である。

「この生きた機械は、あの死んだ機械と手を結んで、未来の隷従の容器をつくり出す働きをしている。もしも純技術的にすぐれた、すなわち合理的な、官僚による行政と事務処理とが、人間にとって、懸案諸問題の解決方法を決定するさいの、唯一究極の価値であるとするならば、人間は、多分いつの日か、古代エジプト国家の土民のように、力なくあの隷従に順応せざるをえなくなるだろう（阿部行蔵（代表）訳『世界の大思想23 ウェーバー政治・社会論集』329頁）、と。われわれはさらにこうつけ加えることができるだろう。日本の受験システムがうむ受験型人間像もまた気の抜けた魂であり気の抜けた知性である、と。ただし、厄介なのは、受験システムの自己標準化によってつくられる人間像—熱情も意味もなく、しかしそれなりの頑張り人間—は日本社会の適応類型人間ニサラリーマン型人間像（職場モデル社会）と対応し再生産されてしまうことだ。

こうしてみると、丸山眞男が指摘した昭和初期の軍国主義時代の日本の指導者の精神型態—帝大や陸大を出、順調な出世街道を経て日本帝国の最高地位をしめた指導者のずるずるとした既成事実への屈服と権限への逃避（『増補版 現代政治の思想と行動』未来社、91-92頁）—とそれから約60年後にアメリカの小説家マイクル・クライトン（Crichton, M.）が描出した日本のホワイトカラーの社会的性格—「アメリカ人はどんなときにも核となる自分があると信じているのに対して、日本人は立場こそすべてを決定すると思っている」（『ライジング・サン』）—が驚くほど類似していることにあらためて気がつく。いまやこういえるだろう。いずれも日本の受験システムの隔れたアジェンダの産物である、と。